

## 第77回国民体育大会いちご一会とちぎ国体 報告書

(一財) 栃木陸上競技協会

1. 開催期日 2022年10月6日(木)～10日(月)
2. 会場 カンセキスタジアムとちぎ(栃木県総合運動公園陸上競技場)
3. 実施種目 男子28種目 女子27種目 男女混合1種目 計56種目
4. 競技役員 418名
5. 新記録 U18日本記録 成年女子5000mW  
日本高校記録 少年A男子ハンマー投  
日本中学記録 少年B男子3000m  
日本高校最高記録 男子300m  
大会記録 成年男子110mH、成年女子5000m  
成年女子やり投、少年A男子ハンマー投  
少年女子Aやり投、少年男子B100mH  
成年少年共通女子4×100mR
6. 発生した問題点とその解決方法

### ●事例1

成年少年女子共通4×100mRにおいて、予選4組2レーンのスターティングブロックの設置位置の間違え。800mのスタート位置に誤って設置。競技役員、選手も気づかずそのままスタート。出発後ブロックを片付ける際に出発係が気づき、本部に報告。

\*対象チーム監督に説明・謝罪、救済として準決勝へ。

### ●事例2

少年女子共通三段跳において、3回目の正式記録と目測(痕跡場所と距離表示板)が明らかに違いすぎると3県から抗議。跳躍審判長が、光波計測器や距離表示板の位置などを確認するが問題はなかった。しかしながら各県が提出した映像を跳躍審判長、JTOが確認した結果、計測が適切になされなかった可能性があったため、抗議申し立てした3県のうち1県に対し抗議を認め3回目の試技についてやり直しをさせた。また、もう1県は、新たな映像を提出した上で上訴し、それを Jury が認めたため、3回目の試技についてやり直しをさせた。なお、残りの1県については3回目の試技やり直しは認めなかった。

2県の選手に3回目の試技のやり直しをさせた結果、当該2県選手がトップ8に入り順位が変動した。抗議前に決定していたトップ8から落ちた2都県がこの結果に対して抗議。3回目終了後に抗議申し立てをした3県のうち2県に対し、やり直しをさせた根拠と3回目のやり直しを実施した結果、順位が変動したことを伝えた。この抗議の裁定に対し2都県が上訴。上訴でも抗議で説明した通りと裁定を伝えたが、2都県は Jury からの説明を要望。そこで Jury が裁定を覆し、当該2都県の選手に4回目以降の試技を実施することを認めた。この後、一連の抗議・上訴・裁定に関する事で日本陸連役員の方針のもと、抗議・上訴・裁定のやり直しが行われ、2都県の上訴を棄却、2都県選手の4回

目以降の試技は実施しないことを決定し、通達した。2都県側はこれらの処遇に納得せず、主催者側が説明・説得を試みるも折り合いをつけることができなかった。次の日の朝、最終的に抗議をした2都県に対して、3回試技が終わった時点の順位（7位・8位）の入賞とその順位の点数の半分を与えた。また、救済でトップ8に入賞した2県の順位が7位・8位となり、点数が半分となることを了承していただいた。

\* ジュリーが裁定を覆したことが大きな間違いであった。ジュリーは栃木県の審判員のみで構成していたが、他の都道府県にも派遣依頼するべきであった。

#### ●事例3

成年少年男女混合4×400mR予選において、第2走者がトップで200m地点（コーナートップ）を通過したにも関わらず、競技役員の誘導ミスにより1番外側へ誘導してしまった。明らかに競技役員の誘導ミスによるもので、弁解の余地がなく、救済により決勝へ進出させた。

\* 競技役員の誘導ミスはあってはならないことで、大会前の審判員打合せ等において綿密な確認を要する。

#### ●事例4

成年少年男女混合4×400mR予選において、9レーン1走から2走の選手にバトンパスを完了した後、2走選手の前を5レーンの走り終わった選手が横断しようとするレーン内に入ったため、2走選手が避けるように走り、9レーンの選手が本来の進路を走行することができず不利益を被ったと判断し、5レーンのチームをDQとし、9レーンのチームを救済し、決勝進出とした。

\* 男女混合のレースの走順によって男女の差が大きく、特に第1走者では、女子の選手が大きく遅れて第2走者にバトンを渡すことになる。バトンを渡し終えた選手は、まだバトンが渡っていないチームが後方からくることを確認しないと接触の恐れやレーンの侵害が発生してしまう可能性がある。この予選の事例を踏まえ、決勝では、競技役員（出発・マーシャル）にこのことを説明し、選手にも注意を促すこととした。

#### ●事例5

成年少年男女混合4×400mR決勝の番組編成について、予選で8チームが決勝へ進出し、そこに救済を受けた2県が入り、決勝進出が10チームとなった。番組編成は、予選を通過した8チームと救済された2チームの2組とした。これに対して、救済を受けた2県からどうしてこの番組編成となったのか質問があった。結果的には、番組編成は、変更せず決勝は2組のタイムレースとなった。

\* この件については、今後、救済されたチームがあり、番組編成が決勝2組のタイムレースとなってしまう場合は、5チームずつに分ける場合もあるなどの大会申し合わせ事項等で柔軟な対応をお願いする。

### 7. その他

コロナ禍の影響により延期・中止が続き、3年ぶりの国体開催となった。またコロナ禍で

の大会となり、事前の PCR 検査や抗原検査、検温、消毒などの対応や 2 階席を各都道府県選手団、3・4 階席を一般の観客席とした。1 日目と 2 日目が冷たい雨となったが、今大会において、U18 日本記録 1、日本高校記録 1、日本中学校記録 1、日本高校最高記録 1、大会新記録 7 など好記録が誕生した。最後に、今大会から実施された男女混合 4 × 4 0 0 m リレーで大会 5 日間が終了した。

本県での開催は、1980 年（昭和 55 年）栃の葉国体以来 42 年ぶりであり、全国規模の大会は、1993 年（平成 5 年）の栃木インターハイ以来 29 年ぶりとなった。審判員の課題として高齢化と人員不足、協力の依頼等大会直前まで苦勞した。今回の経験を今後にかせるように継承していきたい。